

私のモーツァルト・イヤー



A handwritten signature in black ink on a light-colored, textured background. The signature is written in a cursive, slanted style and reads "Mozart".

2006-10-18 三水会

野口幹夫

目次

- 1、再びのモーツァルト・イヤーを迎えて
- 2、天才モーツァルトはなぜ就職できなかったのか。
 - 2-1 レオポルドモーツァルトの願いと挫折
 - 2-2 貴族と王
- 3、ザルツブルグからウィーン
- 4、フリーメーソンの団員
 - 4-1 フリーメーソンに入団した頃
 - 4-2 フリーメーソンとは
 - 4-3 モーツァルトのこころざし
 - 4-4 魔笛
- 5、ウィーンとプラハ
 - 5-1 プラハとオペラ
 - 5-2 アマデウスのロケ地
 - 5-3 ブラチスラバにモーツァルトが
- 6、モーツァルトの死
 - 6-1 葬送の音楽
 - 6-2 アヴェ・ヴェルム・コルプスは何を歌っているのか
 - 6-2 レクイエム モーツァルトの思い通りのレクイエムを聴く

1、再びのモーツァルト・イヤーを迎えて

今年はモーツァルト生誕 250 年記念イヤーである。石坂さんから三水会 10 月発表の機会を譲られて、この記念の年にモーツァルトを語ることが出来たことに感謝したい。

1991 年、いまから 15 年前に没後 200 年の記念行事が多彩にあって、その印象が残っているものだから、今年またモーツァルト・イヤー？と、はじめは、あまり気にしなかったが、年半ばで私にとっても大きなモーツァルト・イヤーになってきた。

ちなみに 200 年記念のときは、その数年前から映画「アマデウス」の大成功や、同じ題名をかぶせたサントリー音楽文化展があって、盛り上がっていた。また学術的にも楽譜出版のベーレンライター社がモーツァルト全集を刊行したし、いくつかの CD の記念出版があった。そのうちの London/Decca 社が大事業として出した 127 枚の CD によるモーツァルト全集（22 万 5 千円）を、ゴルフ会員権から比べれば安いものと思い、しかしそれなりの決心の末買い求めた。しかし全集というものは聴き方が難しく、時折に拾い出しては聴くだけであった。

これらの行事に比べると、今年はずっと地味かもしれない。書物も出版されているが 2 番煎じばかりだ。200 年で発見されるべきものは発見され尽くしていたという感じである。

そんな中で、私のモーツァルト・イヤーは、すべてを聴いてはいなかった CD 全集を全部聞こうと決めて、車にこの全集を順に乗せていった。今 7 割は進んだが、カーステレオなら録音のよしあしはさほど気にならないし、このように順に聞くと彼の年代と環境と音楽がマッチして聞けて新しい発見もあって楽しい。

NHK が「毎日モーツァルト」という番組を年初からはじめた。ウィークデーの朝 8 時から 10 分間彼の生涯とその音楽を紹介している。ナレーターは今人気絶好の山本耕史。モーツァルトが住み、旅をした風景を美しく紹介しながら、さまざまな人たちが彼の人生を語り音楽をかける。これにすっかりファンになって毎日聞いている。

この 3 月 H 交通社からモーツァルト 250 年記念東欧ツアーの案内があった。「毎日モーツァルト」を毎日みていた妻も喜んでくれて参加した。9 日間で 4 カ国ザルツブルグ ウィーン ブラーハ プラチスラバ プダペストを巡ったが、どこの都市でもわが町こそゆかりの町とばかりモーツァルト企画が花盛りだった。

モーツァルトに漬かっている今年、それなりに再発見があった。

単純な話し、モーツァルトがなぜこのように人々に広く愛されるのかについてであった。その音楽が、純粹に「人に喜びを与える」というばかりではなく、その音楽に秘めた人生の重みが次々に再発見されるにつれて、その音楽の魅力が深まるからではないだろうか。

彼は、その時代人間がやっと到達した「自由、平等、博愛」の思想を旅で学び、人生を通して、その思想に生き抜くという困難なことをやった人だ。そのために受けた傷も多いが、朗らかにやってのけた人だった。むろんあの時代、そのようなことを政治的に思想的にやり遂げた人は沢山いる。モーツァルトは、「自由、平等、博愛」の思想への共感を、終生の生きざままで表し、彼だけに許された天才的音楽によって表現したのである。

2、天才モーツァルトはなぜ就職できなかったのか。

2-1 レオポルド・モーツァルトの願いと挫折



父レオポルト・モーツァルトは、ドイツ小都市の製本屋の息子だったというから、その時代の新取の気質の家庭の出であったと想像できる。長男ではなかったため、中世のヨーロッパの若者の多くがそうしたように、聖職者をめざしてザルツブルグのベネディクト修道院で神学を学び始めた。しかし教会は多いとはいえ、司祭の数は限定されているので、それより就職の可能性の高い音楽家に転進した。そしてそれなりに成功しこの落ち着いた地方都市ザルツブルグの司教宮廷の宮廷作曲家・副学長として申し分ない暮らしをしていた。ザルツブルグのモーツァルトの生家が残っている。それは3階の1フロアではあったが、町の最も繁華な一角にあって、彼が学んだ修道院にも、また就職した大司教レジデンスにも隣といってもよい1等地住宅なのだ。もし天才を生まなければ、静かな波乱のない人生であった。



幸か不幸か、幼児ヴォルフガングが、4歳にして、その類まれな才能を示したばかりに彼の人生はすっかり狂った。彼はこの天与の才能は奇跡と考え、広く世間に紹介することを義務と考えた。姉のナンネルといっしょにヨーロッパの宮廷にこの天才姉弟をつれて回った。

レオポルドモーツァルトの願いはこの天才児をヨーロッパ中の有力王室に紹介して、パトロンを見つけて、どこかの宮廷の

音楽家として安定した生活しながら、音楽家としてりっぱな作品を残す姿を見たかった。むろんそれは父としての彼にも安定した良い生活が出来ることを意味した。

しかし彼のこんな夢は満たされることはなかった。

さて話を中断して私のモーツァルトの旅からまずザルツブルグを紹介しよう。

ヨーロッパの古い町には必ずといっていいほど、いい場所に大きな元修道院の建物がある。今はホテルや、図書館に転用されたりしている。ザルツブルグでもレオポルドモーツァルトが学んだ古いベネディクト修道院が残っていて、その一部がわれわれ観光客のためのモーツァルトの夕をやってくれた。修道院が活躍していたときからやっているヨーロッパで最も古いレストランとのことで、ファウスト伝説のファウスト博士がメフィストと出合ったレストランという説明が書いてあった。ここでのモーツァルト演奏と夕食は今回ツアーの目玉であった。





演奏者はモーツアルテウムからの派遣。曲目はアイネクライネナハトムジーク 魔笛、フィガロなど
お客は世界中から集まった。私たちの隣はオーストラリアから、前に素晴らしい美人がいたが、ザルツ
ブルグの人だった。

ザルツブルグは、名のとおり岩塩が取れ、それで栄えた都市国家で、ローマ教皇直轄領であった。歴代カトリック大司教が統治していた。川あり山ありの美しい町だが、こじんまりしていて、大モーツァルトを入れるには容量が小さかった。彼はこの町を飛び出した。



モーツァルトの父の家



ザルツブルグ祝祭劇場



後ろがザルツブルグ城



モーツァルトの像と市場



2-2 貴族と王

王侯貴族と一口に言っても、18世紀は中央集権に向かう時代で、王や皇帝の力が、圧倒的に強くなっていった。かつては王の仲間であった貴族たちは、官僚にその役割を奪われ、裕福な商人に地位を明け渡したりし始めていた。

モーツァルトは貴族達を尊敬してはいなかったが、しかし彼らの経済力なしに生活できなかった。子弟の音楽教師として雇い、また予約演奏会のスポンサーとなったのは彼らである。モーツァルトの親しい友人もまた貴族が多かった。しかし彼らの経済力にはかげりが出始めていた。ウィーンが不況になった1787年以降モーツァルトが生活難に陥るのはそのような貴族達の余裕がなくなったことにも原因がある。

そのようなことを見越して、父レオポルドが息子に望んだことは、天才児にふさわしく皇帝とか王ヨーロッパのトップに召抱えられ宮廷音楽家の地位をえることであった。モーツァルトは神童として、ロンドン、パリ、ローマ、ミラノ、ミュンヘン、ウィーンなどヨーロッパの有力な宮廷に熱烈歓迎された。ローマ法王からも音楽家として最高の黄金の騎士勲章を授かったが、その折の逸話がある。システナ礼拝堂で聖週間の木曜日だけ演奏される秘曲があった。それは楽譜を外に持ち出しすることが禁止されていたのである。その秘曲アレグリの9声部ミゼレーレを聞かせてもらったモーツァルトは、その夜楽譜にそっくり書きあげたという。その曲をお聞かせする。

このように神童モーツァルトの名声はヨーロッパ中に鳴り響いたにもかかわらず、いざ17歳ごろから真剣に定職をもとめたのに対し、どこの宮廷も門を閉ざした。表面上は喝采し、作品の依頼もするが、宮廷音楽家といった安定した職を提供するところではなかった。たとえばミュンヘンのマクシミリアン選帝侯がモーツァルトの才能を高く買いながら「欠員がないから」という理由で採用しなかった。それは単なる不幸なめぐりあわせではない事情があったと推定するほかない。



それをとく鍵は、意外にも彼らがもっとも頼りにしていたウィーンの女帝マリア・テレーゼの1通の書簡にヒントがありそうだ。マリア・テレーゼは5才のモーツァルトに会ったとき、神童として膝に乗せて可愛がったというエピソードがあるが、その子のミラノ王フェルディナントがモーツァルトを雇おうとしたときに、「モーツァルトを雇うのをやめなさい」という手紙を出したのである。手紙にかかれた理由はあいまいだが、拒絶だけは明快なのである。マリア・テレーゼの影響は大きかった。宮廷や社交界のひそひそ話として、それが神童の名をほしいままにしたあのモーツァルトであっただけに、速やかに有力な王侯貴族のサロンに伝わったことであろう。

マリア・テレジアが、彼を雇うのは止めよといったのは、この女帝のフリーメーソン敵視政策で張り巡らせた女帝の隠密網が、そのようなことは頓着しなかったモーツァルト親子の無用心なフリーメーソンへの接触を感知していたからであろう。その時期はモーツァルトの17歳から20歳くらいの就職時期だったために、影響は甚大で、結局どこにも就職できなかった。マリア・テレジアが亡くなったのは1780年、モーツァルトが宮廷に就職するのをあきらめ、自立した音楽家への輝かしい歩みを始めていた頃である。マリア・テレジア亡き後、ヨゼフ二世になって、フリーメーソン弾圧は緩和され、モーツァルトは晴れてフリーメーソンに入団することになるが、そのあとのことは4章で詳しく述べる。

3 ザルツブルグからウィーンへ



今回のザルツブルグからウィーンへのバスの旅は4～5時間かかった。ザルツブルグはアルプスのふもとで、近くの山々はすどく、盛り上がっていた。ウィーンに近付くにつれなだらかな山並みになる。ウィーンの西郊外シェーンブルン宮殿はアルプスのはずれだそう。モーツァルトたちはこの間を馬車で行ったわけだが、当時は何日かかったのだろうか。

さ
てウィーン
に入ると奇

妙な看板が眼に入った。上目使いのモーツァルトだ。もう一人上目使いの男がいた。フロイトだった。この2人が今年のウィーン祭りの主役だそう。



モーツァルトは、宮廷への就職活動をやめて、王侯宗教界からの固定的サポートなしの自立した音楽家になるべくウィーン住んだ。マリア女帝なき1781年のことであった。リスクがあったにもかかわらず、それが成功したのは、モーツァルトの天才とウィーンという町の組み合わせであったからだ。(ヘンデルとロンドンの組み合わせという先例はあったが。) なくなるまでの10年間ここに住んだ。そしてここで人生を开花させた。貴族を含む裕福な市民層は彼を支持した。オペラは、かつては宮廷の内部で演じられるものであったが、18世紀は市民が享受するものになっていた。モーツァルトもこれら高級民衆のためにオペラを書いた。



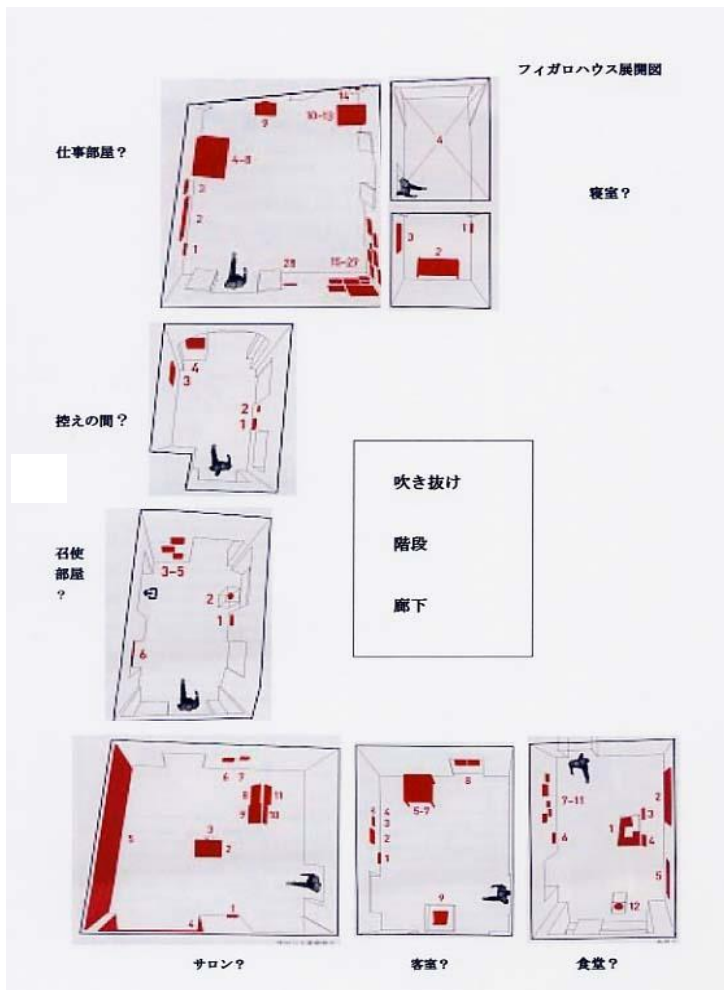
モーツァルトはウィーンの町を8回転居している。まずコンスタンツエの母が営む下宿屋から始まった。幸か不幸か、そこで妻を得、新婚の新居に移った。その後3回転居し、全盛期1784年にはウィーンシュテファン大聖堂近くの8室の2階建てに住んだ。87年まで3年間の多作時代を過ごした家が「フィガロハウス」として保存拡充され博物館になっている。モーツァルト一家が住んでいたときは2階建てだったが、3～4階を増築して博物館としている。訪れる人はいっぱい。モーツァルトが住んでいた2階

は7室で、われわれの眼からは変則的な配置で、部屋の用途は想像できないのが多い。一番奥まった部屋がモーツァルトの仕事場だったといわれている。隣にこじんまりした寝室があった。子供のベッドも置かれていた。

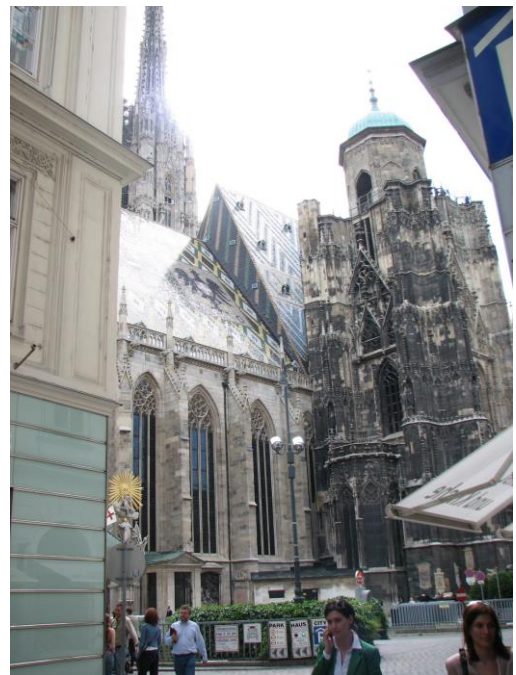
この大きなスペースで始めてモーツァルトのお客好きを満足させることの出来たサロンを持てた。モー

ツァルトの新婚家庭と友人との交流を描いたこんな3重唱がある。『いとしいマンデルリボンはどこなの』K441。このサロンに尊敬するハイドンと父を招き『ハイドン・セット』と呼ばれる弦楽4重奏曲全6曲を演奏して楽しんだ。k458『狩』である。

フィガロハウスと呼ばれるモーツァルト最盛期のアパートの部屋間取り図。



結婚式を挙げたステファン教会
初聖体祝いの行列練習の子供たち



4、フリーメイソン



4-1 フリーメイソンに入団した頃



このフィガロハウスに住んでいた時期の1884年、先に述べたようにモーツァルトは、満を持してフリーメイソンに入団した。この年フリーメイソンの音楽を沢山作曲した。K468『結社員の旅』は父レオポルドの第2階級への昇進を祝ったもの、K471『フリーメイソンの喜び』は彼の属した支社のグランドマスター科学者ボルンが皇帝ヨゼフ2世から賞賛の手紙を受けたことを祝ったカンタータである。これはプラハで2度3度と公演された。

フリーメイソン入団式の図
右端の人物がモーツァルトと言われている。

翌年には父もハイドンも加盟させた。正式の加盟前からウィーンのフリーメイソンの指導者とは親しかったし、予約演奏会のメンバーとしてモーツァルトをサポートしたのも、メイソンのメンバーであった。そのため彼は正式加盟してすぐ最有力メンバーとして遇され、団の位をいち早く昇進していった。

この1784~5年というのはフリーメイソンにとって特異な時代であった。フリーメイソンを弾圧した女帝マリアテレジアが1780年に亡くなって、その子ヨーゼフ2世が皇帝についたとき、影の薄かった彼は、貴族層やカトリック勢力の中で、皇帝としての支配を高めるため、母の保守主義から離れ、政令による改革で、宗教的寛容や、啓蒙主義などの進歩勢力に理解を示した。特にフリーメイソンには近い理解者とみなされた。政府の要人もフリーメイソンが多くいた時代であった。むしろその時期にも、カトリックや保守主義からの攻撃も絶えることなく、せめぎあいが続いていた。刻々とフランス革命が近づいている言わばその前夜でもあり、ドイツのバヴァリア政府ははっきりと死刑を持ってフリーメイソン弾圧をしていた。1790年ヨーゼフが亡くなるやウィーンでも状況は一変する。だからモーツァルトが1791年亡くなるや、コンスタンツエはあわてて彼のフリーメイソン関連の書類はあの膨大な書簡集から取り出して廃棄したのである。有名なモーツァルト書簡集は1785年前後がなくなっているのである。

4-2 フリーメイソンとは

フリーメイソンとは、現在の日本にも存在する公認・公然の団体であるが、実態とは別に人々はそれが隠然とした勢力をもつ世界的な秘密結社で、フランス革命やアメリカ独立戦争を指導した存在とおぼろげな印象を持っている人は多い。

確かにフランス革命前夜のモーツァルトの時代、フリーメイソンはもっとも輝いていたのだろう。その時代の優れた思想家は競って加入していたのだ。ドイツ シュツルムウントドラック時代を作ったゲ

ーテ、レッシング、シラー、フランス革命のミラボー、ヴォルテール、ダランベール、アメリカ独立のベンジャミン・フランクリン、ジョージ・ワシントンなど、この時代の指導的地位にいた人々は、フリーメイソンだった。アメリカ1ドル紙幣の裏面のピラミッドが光るデザインはフリーメイソンのシンボルである。

フリーメイソンはしかし政治団体ではない。反宗教組織でもない。単に啓蒙思想を共有し、こころざしをあかす男の友好団体であった。修養の手立てを中世の石工職人制度に学び、徒弟、職人、親方の段階を試練を経ながら昇って行き、死とともに神性に近付いていく。死の克服は親方の段階で重要なテーマで、モーツァルトが、その思想に達していたことは、のちに触れる。

また啓蒙思想というのは、長く続いた封建主義、カトリック宗教権力主義に反抗して、ブルジョア市民層が共有した、科学主義、人権主義、あるいはフランス革命が標榜した自由、平等、博愛の思想であり、フリーメイソンに直接の関係はなかったが、当時のメイソンの人たちによって熱心に支持された。この時代もののわかった貴族達は、王も含めて、この思想に敬意を払い、半ば先端流行のようにフリーメイソンに入った。



マリア・テレジアは、本能的に、これを敵視したが、大オーストリア帝国を女の細腕で守り、盛り上げた女性帝王としては、当然のことであった。彼女から見ればフリーメイソンは男の危険な遊びであったのだ。その夫王フランシス一世はオーストリアにフリーメイソンを導入したし、息子ヨーゼフ二世は、テレジアが死ぬや一時的に宥和政策をとった。しかし王政を守るためには、マリア・テレジアと同じく、これを弾圧するのが当然であった。ヨーゼフ二世もやがて変身してきびしい徹底した弾圧に回る。モーツァルトの妻コンスタンツェは彼の死後フリーメイソンの証拠をすべて処分したのもそのためである。

4-3 モーツァルトのこころざし

モーツァルトがこの歴史上できわどかった時期に、このフリーメイソンに加盟したが、それは仕上げ作業のようなものだった。彼がザルツブルグでコロレド大司教の宮廷音楽家を辞した時は主体的に、そして多くの宮廷への就職を拒絶されたときは、欲せざるかたちで、時代の反逆児としての一生を歩んだことこそ重要なことである。フリーメイソンに加盟しようがしまいが、実際に啓蒙主義を身をもって実践していたのだから。

彼は幼くして多感な青年時代を、父に連れられてヨーロッパを巡り歩いていたとき、当時の進歩思想であるフリーメイソンの仲間に世話になり、啓蒙思想の自由・平等・博愛の思想に共鳴していたのである。マリアテレジア女帝にすれば、音楽家は音楽奉公人であり、フリーメイソンにかぶれるような音楽家は干さなければならなかった。

しかしそれは人類には幸せなことだった。モーツァルトの天才音楽が今も人類の夢であり続ける自由・平等・博愛の精神の上に花開いていったからだ。

4-4 オペラ『魔笛』

「魔笛」はフリーメイソンの入団の秘儀を表したものだと言われている。確かに高僧ザラストロの詠唱はフリーメイソンの正義、寛容、愛を語るし、タミーノ王子とパミーナが試練を受けて入団が許される構成や音楽はフリーメイソン結社の儀式を模したもののようである。しかし実際のフリーメイソンは男子だけしか入団できなかったが、「魔笛」では二人で入門の試練を受け、受け入れられるし、受け入れ側も女性が一杯だから、フリーメイソンをヒントにしているが、忠実に模しているわけではない。

このオペラは、もっと別なことをいいたがっているようだ。

魔笛の主なる筋は王子タミーノと皇女パミーナの恋物語であるが、実は隠れたストーリーがある。まず皇女パミーナはなんと夜の女王と高僧ザラストロの娘なのだ。この二人はかつて結婚していて娘パミーナまで作っているが、今は不倶戴天の敵同士になっている。パミーナは父の元にいたが、母に会いたくて逃げ出した。母はその娘を取り戻そうとして捜し求めている。そこに森に紛れ込んできた王子タミーノが絡み、いっしょに悪役ザラストロを殺そうとする。夜の女王は出合った娘には短刀を渡し、これで父を殺せという。

ところがここで観客はどんでん返しを食う。実はザラストロは高潔な人格で、寛容と平和のシンボル、逆に夜の女王は憎しみと、復讐のとりこになった恐ろしい女であることがわかる。夜の女王軍団は雷に打たれて地獄に落ちて、無事タミーノパミーナは父ザラストロの元に救われ幕になる。このようにかなりエキセントリックな物語で、モーツァルトの意図を忖度したくなる。

私の憶測だが、モーツァルトは女帝マリア・テレジアを、夜の女王として描いたのではないか。その夫でオーストリアに自らフリーメイソン支部を作ったフランシス 1 世がザラストロではないか。モーツァルトは若い頃マリア・テレジアこそ自分の味方の女王と見ていたらしく、3度も「天の女后 レジナチェリ」を作曲している。マリア様を天の皇后として賛美する曲である。

その彼女が彼の就職を妨害し、またフリーメイソンの啓蒙思想を弾圧したと知って、最後に憎々しい夜の女王にして、雷に打たせたのかもしれない。この役のソプラノさんには、最高音Cまで強いて悩ませ、あるソプラノ歌手は、モーツァルトはソプラノ嫌いだったのでしょかと言わせている。

5、ウィーンとプラハ

5-1 プラハとオペラ

モーツァルトは幼児時代から就職活動時期、ヨーロッパ中を旅したが、それはザルツブルグ、ウィーンより西の諸都市に限られていた。西に進んだ文化があったからである。

1787年プラハを始めて訪問したのは、これら西の諸都市とは違った目的であった。前年の『フィガロの結婚』の公演が、ヨゼフ二世をだましてとったような許可で実現し成功したものの、ウィーンでは演奏に妨害もあり、再演回数も評判の割には伸びなかった。その年の予約演奏会もスポンサーが減少し、にわかに家計がきびしくなり始めた。モーツァルトの啓蒙主義に隠微な攻撃が始まったのだ。そんな暗い気配の中で、明るい招待が届いた。プラハでの『フィガロの結婚』の大成功を機に招かれたのである。

チェコの首都プラハは、中欧きっての歴史ある街で、神聖ローマ帝国カール5世がこの街をその首都として以来、学術文化も栄えた。宗教改革の100年前1414年にヤン・フスがカトリックの腐敗を攻撃し、改革を訴え、火刑にされたが、その像が市の中心地にある。プラハの春ではロシア共産主義政権への反抗で勇気を世界に与えた。

モーツァルトの時代プラハはハプスブルグ家の支配下にあった。チェコ語を話す異国ではあった

が、同じオーストリアであったのだ。しかしウィーンのような激しいフリーメイソン攻撃もなく、街は「フィガロ・フィガロ」で沸きかえていたという。モーツァルトは妻と共にこの年に2回も滞在した。この街のために作曲した交響曲『プラーハ』、そしてオペラ『ドン・ジョバンニ』を作って初演している。その後89年に2回、さらに亡くなる91年の夏には、8月から一月半滞在し、オペラ『皇帝ティトスの慈悲』を作曲し、初演したのである。プラーハはモーツァルトにとって人生の終わりに暖かく手を差し伸べてくれた憩いの街なのであった。

5-2 アマデウスのロケ地

1984年の映画『アマデウス』を覚えておられる方も多いであろう。冒頭から観客はくすんだ18世紀のウィーンにさまよい込んだような気分になったものである。実はこの映画はウィーンではなく全編プラーハでロケされたのだった。監督のミロス・フォアマンはプラーハ出身のチェコ人で、プラーハの春事件でアメリカに亡命した。この作品を撮影するために故郷に入ったのだ。

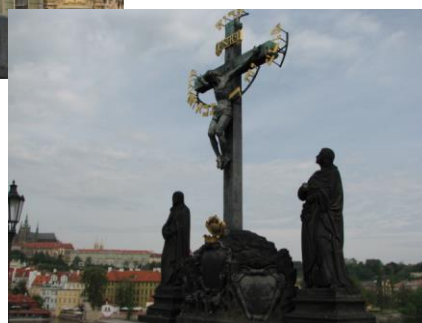


大統領府



カレル橋のキリスト像

チェコプラハ市街、ヤンフスの像



5-3 ブラチスラバにもモーツァルト

今回のたびで思わぬ街でモーツァルトを見た。それはスロヴァキアの首都ブラチスラバである。プラーハが彼の晩年の訪問地であったように、ブラチスラバはザルツブルグからもウィーンからも東の方で文化の薄らぐ方向なので、彼がこの街を訪ねたという記載はどの本にもない。しかし実際にブラチスラバの小さな旧市内に彼が来て演奏会をしたという家があった。またオペラハウスの飾り胸像の真ん中がモーツァルトであった。今回の旅でどこにもモーツァルトに出会わなかったのはブダペストだけだった。



この街では街角に現れたスロバキア大統領と出会った。



6、モーツァルトの死

6-1 葬送の音楽

父（在ザルツブルク）へ〔ウィーン、1787年4月4日〕

…たった今、私をひどく打ちのめすような知らせを聞きました。最近のお手紙から、ありがたいことに大層お元気だと推察できたばかりなのに、お父さんが本当に病気だと聞いたので、なおさらがっかりしました。…もっとも私は、何ごとについてもいつも最悪のことを考えるのが習慣になっています。死は（厳密に考えて）われわれの一生の真の最終目標なのですから、私は数年この方、人間のこの真の最善の友ととても親しくなって、その姿が私にとってもう何の恐ろしいものでもなくなり、むしろ多くの安らぎと慰めを与えるものとなっています！そして、神さまが私に、死がわれわれの真の幸福の鍵だと知る機会を（私の申すことがお分かりになりますね）幸いにも恵んで下さったことを、ありがたいと思っています。私は、（まだこんなに若いのですが）もしかしたら明日はもうこの世にいないのではないかと、考えずに床につくことは一度もありません。それでいて、私を知っている人はだれ一人として、私が人との交際で、不機嫌だったり憂鬱だったりするなど、言える人はいないでしょう。そしてこの仕合せを私は毎日、私の創造主に感謝し、そしてそれが私の隣人の一人一人にも与えられるようにと心から願っています。…しかし思わくどおりによくおなりにならないとしても、---誓ってそれを私にお匿しにならず、ありのままの真実をお書きになるか、だれかに書かせるかして、私が一刻も早くお父さんの腕に抱かれることができるようにして下さい。そして、その快い期待の中で、妻やカールと一緒に、お父さんのお手に1000度もキスをします。いつまでもお父さんのもっとも従順な息子 W・A・モーツァ

ルト

この手紙が届いた 1 ヶ月後 1787 年 5 月 28 日父レオポルドは亡くなった。

父もフリーメーソンに入団させた 1785 年 7 月に作曲した死と再生の儀式のための『フリーメーソンの葬送音楽』がこの手紙と呼応するものである。

彼は死をこのように考え、怖れていなかった。同時代人で同じ思想の同志ゲーテの死生観と共にするものであった。

6-2 アヴェ・ヴェルム・コルプスは何を歌っているのか

アヴェ・ヴェルム・コルプスは、モーツァルトの死の年にかかれた珠玉の小品である。妻コンスタンツェが治療にいった温泉地バーデンの教会合唱隊の友人に頼まれて作った。この曲の歌詞は日本ではまず理解されないまま歌われている。

CDの解説や、ウィキペディア百科事典にみられる日本の一般的な珍訳

「めでたし、乙女マリアより生まれ給いしまことのお体よ。人々のため犠牲となりて十字架上でまことの苦しみを受け、貫かれたその脇腹から血と水を流し給いし方よ。我らの臨終の試練をあらかじめ知らせ給え」

モーツァルトが自分で原詩に手を入れた歌詞に私がつけた訳は

「ご聖体であるパンを賛美します、

あなたは処女マリアから生まれられ、きびしい受難をうけられた。わき腹を刺されてどっと水と血が流れ出したような残酷な十字架上の受難を受けられたが、でも、しかも不死であり、永遠のいのちを得られたのです。われわれのために、そのご体験を、私の死の時にも追体験させてください。」 これでやっと意味がわかるでしょう。

6-3 レクイエム

1791年12月5日モーツァルトは、レクイエムの作曲途上になくなった。第7曲ラクリモサの8小節目が絶筆である。一般にはこのレクイエムは彼の死のために未完に終わった。弟子のジュースマイヤーが補作したとされている。

わたしは彼の死への思いから見て、彼はこの曲をここで完成したのだと思う。

ラクリモサの長い8小節はまるで階段を上っていくようにひたすら上昇する。あたかもその頂点で、彼は新たな生に入ってしまったと宣言して筆をおいたように思える。今回、そこで切った特別の音楽を作ってそれを聴くと、その思いが確信に近くなる。

第6曲コンフターティスと、第7曲ラクリモサのつながり、モーツァルトの筆をおいたところで終わるようにした曲だ。その歌詞は。

第6曲 コンフターティス 呪われた者どもを罰し、はげしい火の中に落とされるとき、私を選ばれたものの一人として招き給え。くだかれた心をもてひれ伏して願う。

第7曲 ラクリモサ 罪ある人がさばきのために塵からよみがえるその日こそ涙の日である。願わ

くば神よ、やさしきキリストよ、かれらを憐れみ安息を与え給え。
であるが、ラクリモサの途中でモーツアルトは筆をおいた。

Lacrymosa dies illa	涙の日、その日
<u>Qua re sur get ex fa vil la</u>	<u>灰からよみがえる、</u>
<u>Ju di can dus ho mo re us</u>	<u>裁きのため、罪の人間は</u>

この 16 シラブルを 1 音ずつ 4 小節に渡って、上昇させてついに頂点に至らせるのである。
我ら罪人は、裁きのためであろうとなんであろうと、灰からよみがえるのだ、という宣言をすればもう
後はない。ミサ典礼文はこの後に「願わくば神よ、やさしきキリストよ、かれらを憐れみ安息を与え給
え。」と続けるが、モーツアルトには不要な言葉だった。

モーツアルトには墓も無い。
フリーメイソンの彼にはカトリックの聖職者は冷たかったし、教会の墓地は使わせなかった。
同じフリーメイソンでも父レオポルドには墓地がある。田舎のザルツブルグではメイソンのことは、秘
密でおれたのだろう。